

50 なんとか心身を落ちつかせ安らごうとしている。

【六段】

51 同病相憐れもうと思つて同じような悩みを持った友を（古典籍に）求める。

52 憂い（左遷され、流されてきた苦しみ）を（少しでも）軽くしたいと思つて、そういう目にあつた先人のあとを尋ねる。

53 才能などは（かえつて）時運に不利であり結局何の役にも立たない。

54 富貴の身とかいうものは、元來行き悩んで困難にあうものだ。

55 傅巖ふがんの野で傅説ふえうは罪人に交じつて土木工事に従事していた（不遇の時代があつたし）、

56 范蠡はんれいは扁舟（小舟）に乗つて五湖から揚子江に浮かんで去り行方をくらし わが身の保身をはかつた。

57 長沙の地は低地で湿気が多い。（この地は前漢の賈誼かぎが若くして博士に任ぜられ一年の間に太中大夫まで出世し、そして天子は彼を公卿の位に就けようとしたが、その事を妬まれ卑湿の地、長沙王の太傅に左遷させられたところである）。

58 湘水は深くひろびろとよどみなく流れている。（この川は屈原が懐王の左徒として王の寵愛が厚かつたが、

上官大夫がこれを妬み讒言したので江南に貶められ、その後、石を抱いて汨羅の川に身を投じて死んだ所である。）

59 一方の私は下降直前（正月七日）に、位は従二位に叙せられたけれど、それも空しい昇進だった。

60 ただ数を揃えるために、一体誰を、私の後釜の右大臣の官に任じたことであろう（実は大納言 源光を右大臣に任じたのである）。